はじめに

感染症には，誰もが経験したことのある鼻かぜや食あたり，皮膚の化膿症のような軽いものから，生命に危険が及ぶ重篤なものまである．人や物の交流が迅速，頻繁に行われ，広域化した現代社会では，かつては地域の風土病とされていた感染症が，地球上を席巻する規模で流行する危険が生じ，社会問題にまで発展することがある．

感染症をなくすことはできないが，早期に治療して症状を軽減したり流行を拡大させないよう予防したりすることは可能である．そのためには「病原体」を知り，「病原体と宿主（ヒト）との関係」を理解することが不可欠である．しかし，病原体は肉眼で観察できない微生物（細菌，ウイルス，真菌，原虫など）や肉眼で観察できる小動物（寄生虫，節足動物など：医動物）など多種多様であり，宿主の抵抗力もさまざまで，実際の感染症の様相は複雑である．

長年，看護微生物学の教育に当たってきた者として，系統分類に基づき，細菌学，ウイルス学，真菌学，寄生虫学に沿って病原体の総論・各論を学ぶ方法では，ラテン名で羅列的に登場する病原体に興味をもちにくいことや，病原体がどのように感染症の発症につながり，人々の健康を脅かす問題となるか，医療従事者としてどのように感染症患者に接し，感染を予防すればよいかなどを，限られた授業時間内で提示する難しさを感じていた．

2019年末以来，世界中がほぼ同時に，新型コロナウイルスによるパンデミックの渦の中に巻き込まれた．これによって医療現場はもとより，社会・経済活動から日常生活の有り様まで大きな影響を受けた．臨床微生物・医動物が引き起こす感染症の脅威を否が応でも実感した年月であった．COVID-19の予防には，手指衛生，マスク，換気などの基本的な対策とワクチンの接種が，個人にとっても社会にとっても大切であると認識されるようになった．感染症の制御に当たっては，看護師がしっかりした知識と実践のもとに，指導的役割を果たすことが重要である．

かつての疫病－天然痘やペストの大流行は歴史の転換点になった．今般のパンデミックも，21世紀の社会的転換期になるかもしれない．経済発展一辺倒の産業政策の結果としての地球環境破壊が，新興感染症の流行と無関係とはいえない．パンデミックの収束のためには，まずは，発展途上地域を含め，世界中で同時にワクチン接種を達成することが望まれる．そして，地球環境保護にも世界協調が求められる時代となった．

本書は，2004年10月初版，2013年１月第２版，2015年１月第３版，2022年１月第４版と版を重ねる中で，教員や学生から意見・質問をいただき，病原体の解説と患者事例の順序を工夫したり，巻頭に臨床微生物・医動物一覧を追加して検索性を高めたり，各解説により詳しい記述を加えたり，動画等が視聴できる「メディカAR」へのアクセスを可能にしたりと，改善を重ねてきた．さらに，めまぐるしく変化している感染症の現状や行政対応に合わせて，毎年のように細かな修正を加えている．その間，執筆者の交代，患者事例の刷新，「メディカAR」の充実などもなされた．

改訂第５版では，編者に医学監修（四柳）が加わり，感染症の推移や国家試験の出題内容を精査した．時代に即した記述となるようすべての章で内容の見直しを行い，さらに新たに多くの専門家も執筆者として加わったことで，最新の知見に基づいた教科書となっている．また，構成も見直し，学生がより理解しやすいように後半にあった「感染症の分類と感染防御機構」を２章に移動させた．そして確実な知識の修得ができるように，細かなところにも丁寧な工夫をした．例えば，病原体はイメージしやすい模式図で示した上でその特徴を明示し，「臨床場面で考えてみよう」はストーリー性をもたせた事例とそれに対する設問を挙げて考えたり調べたりできるようにし，加えて全体での用語の統一も行った．

本書を，専門基礎分野だけでなく，内科，外科，小児科等の臨床科目で感染症や感染コントロールを学ぶときにも参照していただければ，より臨床に根ざした看護とも結びつくと思う．インフェクションコントロールナース（ICN）を目指して勉強している臨床看護師の方々にも，現場での経験や実践に照らし合わせて活用いただきたい．

本書の改訂に当たり，今回も関係の方々に大変お世話になった．心から感謝の意を表したい．

編者一同